

シヨバ・ラニ・ダシユ著『パーリ語文法―仏典の用例に学ぶ』

佐々木 閑

1. 出版の意義

二五〇〇年前に仏教を創設したシャカムニが、実際にどのような言葉を話していたのかは分かっていない。しかし仏教成立からほどなく、教えが広まる中で、とあるインド地方の言葉が布教のための言語の一つとして用いられるようになり、それがそのまま海を渡ってスリランカに入ったというのは間違いない事実である。スリランカの人たちは、そのインド方言語で語られる教えをそのままの形で、スリランカ語に翻訳せずに伝えることにした。そのため今でもスリランカを基点とした南方仏教諸国では、その古代インドの方言語そのままに仏教聖典が読まれ、書かれ、学ばれている。スリランカでもタイでもミャンマーでもラオスでも、人々は皆、この古代インド語を通して仏典に触れるのである。その「とあるインド方言語」に固有の呼び名はなかったようだが、やがていつしかパーリと呼ばれるようになった。その意味はごくシンプルで、「聖典」である（語源はよく分かっていない）。

パーリ語で今も伝わる仏典はおそらくシャカムニの真の教えに最も近いところにある。もちろん中にはかなり後代になってから成立したものもあるが、少なくともデーイガ、マッジマ、サンユッタ、アングッタラの四部ニカーヤとクッダカニカーヤの中の一部の聖典（スッタニパータなど）は最古の經典群であるし、律蔵に関しても、パーティモツカ・スッタヴィバンガ（波羅提木叉・経分別）と犍度（カンダカ）の成立は上記の經典群と同程度に古い。こういった、

シヤカムニの教えに近づくための最重要聖典がパーリ語で残されている以上、仏教を知り仏教を研究するための、パーリ語は必須の言語ということになる。ではそのパーリ語を我々はどうやって習得するのか。インド・ヨーロッパ語族の一言語にして、古代インドというかけはなれた場所で用いられていたパーリ語を、日本で暮らし日本語に囲まれた環境にいながらどうやって身につけることができるのか。これは仏教、特に古代インドの仏教に関心を持つすべての人にとって重大な問題である。

こういった要請に応えて、日本で最初に著されたパーリ語文法は立花俊道の『パーリ語文典』である。そしてそれ以来、権威あるパーリ語学者たちにより何冊ものパーリ語文法書が出版されてきた。皆それぞれに立派な学者の著作であるから、厳密にして正確、腰をすえてキリキリ学べば必ずパーリ語が習得できるようにできている。多くの日本人がパーリ語を学ぶことでブツダの教えに直接触れてもらいたいという、先学たちの篤い思いの現れである。

とはいえ、実際にそういった既存の文法書を机に広げて、一頁一行目から目をこらしながら理解していこうとするとなちまち挫折してしまう。やはり説明が難しすぎるのである。読者もこれくらいのは分かっているだろう、というかいかがりのせいで、聞いたことのない用語が突然現れる。できるだけ厳密に説明することが読者のためになるという過度な思い入れのせいで、初心者が知らなくてよいような細則が延々と現れて根気が切れてしまう。できるだけ見通しよく構造を表示しようという親切心で、いたるところに表や図が現れるが、説明書きのない表や図はただの模様のようにしか見えない。

大学の授業に出て教師の説明を聞きながら一年かけて学ぶというのなら、こういった文法書は有用な教科書になる。しかしそんな余裕もなく、家にいながら独学で学びたいと願う人たちの思いに応えるものではない。これまでのパーリ語学習の環境は、大学のような学びの場に身を置くことのできる、特定の恵まれた賛助人にしか開放されていなかったのである。

二〇二一年三月に大谷大学文学部准教授(当時。現在は教授) ショバ・ラニ・ダシュ氏が上梓した『パーリ語文法―仏典の用例に学ぶ』(法蔵館、税別四、〇〇〇円、以下「この本」と略称)は、このようなパーリ語学習の環境を根底から変えてしまう変革の書である。全体が三〇課から成り、説明文は平易で初心者にも理解しやすく、しかも各課の末尾には練習問題がついている。①一課ずつのワンステップ方式、②平明な説明文、③適切な練習問題という、すぐれた教科書の条件が揃った実在にありがたい文法書である。「パーリ語を独学で習得する」という、これまでは夢であった状況が、この本によってようやく実現する(かもしれない)。

「かもしれない」と言ったのは、実を言うと、この本にはまだ多くの改良すべき問題があり、それらの問題が解消したならば、その時には必ず、この本を用いたパーリ語の独学が可能になるであろうと私自身が考えているからである。今回のこの書評は、この本が真の意味で「最高のパーリ語教科書」になることを願い、そのために今後改良すべき点を指摘するのが目的である。「ショバさんの『パーリ語文法』を応援する会」からの激励文だと思っただきたい。(本来ならば著者の名は「ショバ・ラニ・ダシュ氏」と記すべきであるが、本稿では敬愛の念を込めて、敢えて「ショバさん」と呼ぶことにするのでご了承ください)。

『パーリ語文法』をショバさん本人からご恵贈いただき、手にとってパラパラ目を通して時、「この本を使って実際にパーリ語を教えてみたい」という思いが湧いてきた。それくらい文法書として魅力的な構成になっていたからである。前年の二〇二〇年に新型コロナウイルスの災禍が世界を覆い、大学の授業も皆リモートになった。上からのお達しであるが、それまで私の授業に参加していた一般人の聴講生(正式には科目等履修生というらしい)にも見てもらいたいと思ったので「公開動画」での配信にした。どこの誰であっても自由に見ることができるといふ方式である。一旦始めるはずみがつき、止めるに止められなくなって、二日に一本の割合で動画をアップし続けていたのだが、ショバ

さんから『パーリ語文法』を頂戴したのは、そんな生活がちょうど一年ほど続いた頃だった。そこで、その YouTube の動画配信の一部に、この本を使ったパーリ語の授業を組み込んでみようと思いついたのである。

やり方は以下のようなものである。毎週、この本の解説を一課ずつ、スマホを使って動画撮影し、一般公開のかたちで YouTube 配信する。一回がおよそ二〇分である。そして各回の最後で、この本の各課の末尾に付されている練習問題を自分で解くよう指示する。個人的に私の指導を受けたいと思う人は、自分が作った答案と返信用封筒を郵便で花園大学の私宛に送る。そうすると私は、その答案に短いコメントをつけ、私が作成した練習問題の解答を同封して送り返す。このやり取りを一課ごとに繰り返していくのである。

どれほどの人が反応するか全く予想がつかなかったが、始めてみるとおよそ四〇名の人から答案が送られて来た。一々質問に答える余裕はないので、答案にちょっとしたコメントを書き、私の作った解答を添えて送り返すというだけの指導であるが、脱落者はほとんどおらず、むしろあとから「最近になって YouTube のことを知ったので、遅ればせながら参加します」といった遅参者が参入してきて少しずつ人数は増える傾向にある。この原稿を書いている時点で第二章のタットプルシャコンパウンド（パーリ語でタツプリサ）まで来ている。そして感心することには、そういった学習者の人たちはそろって、『パーリ語文法』の練習問題をかなりの確率で正答しているのである。正答率はおおよそその感覚ではあるが七〇％ほどであろう。

シヨバさんがこの本で付している練習問題はほぼすべて、パーリ聖典および註釈文献から抜粋した純然たるパーリ文である。それを、大学生ではない一般の社会人が、家にいながらにしてこれほどの正答率で読み解くことができるようになるのは驚くべきことであろう。ここにこの本の、独習書としての真骨頂がある。シヨバさんの『パーリ語文法』は間違いなく、パーリ語学習のための教科書とすぐれた機能を持っているのである。

この本がきわめてすぐれたパーリ語の教科書であることは十分示すことができたとするので、ここから先は、この本がよりすぐれた教科書になるための提言を記していくことにする。実際にこの本を使って教えてみた当事者からの「消費者の声」である。

2. この本への要望（本文中の問題点）

この本は、カッチャーヤナという名の僧侶が紀元後五、六世紀頃に作ったとされる最古のパーリ語文法書『カッチャーヤナ文典』をシヨバさんが読み解き、その内容に沿って現代語で分かりやすく解説したものである。したがって基本の枠組みは『カッチャーヤナ文典』に準じており、実際、この本の末尾には「付録」として『カッチャーヤナ文典』の原文そのものが載っている。これは、伝統的パーリ語文法を現代に伝えるという意味では大変有意義なことであり、パーリ語そのものを学習対象とする言語学者からは大いに歓迎される方針である。しかし他方、その伝統的パーリ語文法には、一から文法を学ぼうという現代の読者にとって都合の悪い要素もいくつか含まれている。

① 格変化表の順序

ノミナティヴ (Nom.) からヴォカティヴ (Voc.) までの八種類の格変化を、どういった順序で並べて示すか、という問題である。シヨバさんは伝統的文法に準じて、Nom. → Acc. → Ins. → Dat. → Abl. → Gen. → Loc. → Voc. の順で示している（三二ページ初出）。これは標準的サンスクリット文法における順序と同じであるから原理的には問題がない。ただ、初心者が格変化を覚えていく際には、できるだけ効率よく習得する必要があるため、同じ変化語尾をとるものはまとめて置いた方がよいという考えもあり得る。サンスクリット語と違ってパーリ語の場合、単数 Dat. と単数 Gen. は共通の変化語尾を持ち（例：Dat. buddhāya, buddhassa に対して Gen. buddhassa）、複数 Ins. と複数 Abl. は全く同じ変化語尾を取る（例：Ins. Abi. νva buddhehi, buddhehi）。この点を考慮するなら、格変化表は、Ins. と Abl. を一括して、Dat. と Gen. を一括して、Nom. → Acc. → Ins. → Abl. → Dat. → Gen. → Loc. → Voc. の順で示した方が学習

者にとつては便利であろう。これはどちらが正しいかという問題ではなく、どちらがパーリ語初学者にとつてとつつきやすいかという問題であるから、私の方から強要するものではないが、実際にこの本を使ってみた実感としては後者の一括方式のほうが明らかに覚えやすいようである。なお、初学者にとつて必須の本である水野弘元『パーリ語辞典』（春秋社）の巻末にある「パーリ語略文法」や、パーリ語文法の権威であるウィルヘルム・ガイガーによる『Pāli 文献と言語』（伴戸昇空訳、Abhidharma Research Institute）でも後者の一括方式を用いている。できればこの順序に変更することをお勧めする。

② 動詞の活用における人称語尾の順序

次は「お勧め」ではなく「強い要請」である。以下の点に関しては、是非とも改版の際に書き換えをお願いしたい。動詞の活用を表示する際に、①一人称→二人称→三人称の順にするか、逆に②三人称→二人称→一人称にするか、という問題である。シヨバさんのこの本は『カッチャーヤナ文典』に準じているが、その『カッチャーヤナ文典』が②を採用しているため、この本も全体を通して動詞の活用は常に②のかたちで示される（四七ページ初出）。しかしこれは現在の標準的文法学習法からみると異質である。私たちは中学・高校時代、パーリ語と同じインド・ヨーロッパ語族に属する英語を学ぶが、その時の人称の順序は一人称→二人称→三人称、すなわち「私」「あなた」「彼・彼女・それ」である。逆の順で習うことは絶対にならない。現在流通しているほとんどのサンスクリット語文法書も、ラテン語文法書も、そしてペルシャ語文法書も、みな①を用いている。「人称変化は一人称を先頭とする」というのは、私たちが自身がすでに体得している世界共通の文法原理なのである。確かに古代のインド、スリランカ世界では②で表すのが標準だったのかもしれないが、それは現在の世界標準からは、ずれている。

そのような状況にある私たちが、この本でパーリ語を学ぼうとすると、そこに突然、三人称→二人称→一人称という順序が表れて、「さあ、これで覚えましょう」と言われるのであるから混乱する。この混乱は、並べる順序を②から①に変更するという、全く造作もない作業で解消する。したがって、改版の機会があれば是非とも書き換えていただきたい。『カッチャーヤナ文典』が①ではなく②の順で書かれているということは、注意書きでその旨指摘しておく程度で十分であろう。

私が YouTube 動画を作成する際にも、ここが最大のネックになった。仕方がないので、動詞の活用を教える時は、「この本の人称変化表は上から下ではなく、下から上に向かって覚えて下さい」と何度も指導せざるをえなかった。この点を改良することが、この本が最良の教科書になるための絶対条件である。

③ 関係詞の用法説明

なぜ『カッチャーヤナ文典』で十分に語られていないのか、その理由は分からないが、関係詞（関係代名詞、関係副詞）の用法に関する解説がこの本にはほとんど書かれていない。英語の関係代名詞で苦労した経験をお持ちの方はよくお分かりだと思うが、日本語を母語とする者にとつて、関係詞というのは理解するのが難しいやっかいな規則である。パーリ語やサンスクリット語にも同様に関係詞の規則があり、しかもかなり複雑である。それをクリアするためには様々な種類の例文にあたって、感覚として体得していくしか方法がないのだが、この本にはそのための十分な記述が存在しない。『カッチャーヤナ文典』が語っていなくても、この本をパーリ語学習の教科書として出版する以上、関係詞の用法を無視することはできない。これもまた、改版の際には、新たな一課を付け加えるくらいの馬力で、十分な関係詞の解説を付していただきたい。

④ 動詞の語根

パーリ語もサンスクリット語と同様、動詞の語根というものを重視する。動詞が状況に応じて様々に変化していく、その基盤となる基本形である。サンスクリットなら *gam* が「行く」という動詞の語根で、それが状況に応じた変化形をとっていく。現在形三人称単数なら *gacchati* になる、といった具合である。パーリ語にも同じシステムが想定

されているのだが、ただ、語根の表記方法がサンスクリットと違って、「パーリ語の伝統的な文法学者たちによれば、動詞の語根は母音で終わる」(四〇ページ)。サンスクリットの語根は子音で終わることも多いが(たとえば gam)、パーリ語では語根は必ず母音で終わらねばならないので、語根の形がサンスクリットとは違ってしまっている(gam がパーリ語では gamu になる)。

伝統的なパーリ語文法の本である『カッチャーヤナ文典』に沿って説明するこの本でも、動詞の基本形はこのパーリ語方式の語根で示される。しかしこれは、今からパーリ語を習得しようとする初学者にとっては不便で煩わしい情報である。現在の一般的な方式として、パーリ語の動詞は現在形三人称単数の形で表示することになっている。日本人が利用する主なパーリ語辞書、たとえば水野弘元の『パーリ語辞典』や Pali Text Society の Pali-English Dictionary をみれば、動詞の項目は皆、現在形三人称単数のかたちで示されており、パーリ語方式の語根はどこにも見当たらない。パーリ語方式の語根は、パーリ語仏典を読もうとする者にとってほとんど価値のない情報なのである(もちろん、パーリ語文法学者にとってはきわめて重要であるが)。シヨバさんもこのことは承知していて、「パーリ語の動詞はサンスクリットと同様、語根から作られているが、サンスクリットと異なって、語根がわからなくても、sgpre (現在形三人称単数…佐々木) の形から辞書で動詞を調べることが可能である」「本書においても以降、主語を示さない辞書の形(すなわち現在形三人称単数の形…佐々木)で動詞を表記する」(四〇ページ)と言っている。

したがってこのあと、動詞が表記される場合は、標準的表記方法である現在形三人称単数の形で示されるはずなのであるが、そうはなっていない。現在形三人称単数で示される箇所もあるが(例…四三ページ)、語根だけが示されていて現在形三人称単数が書かれてない箇所もあって、表記がばらばらである。これは初学者にとっては途方にくれる不備である。その動詞を巻末の語彙集なりパーリ語辞書なりで調べようと思っても、動詞語根しか分からない場合は、項目から見つけることができない。辞書はみな、現在形三人称単数から引くようにできているからである。確かにこ

の本の巻末語彙集では、当該動詞を説明する説明文中に、その動詞の語根が示されている場合も多いが、説明文の中にあっても、それを一々見つけ出すのは苦勞である。四〇ページの「動詞は現在形三人称単数の形で表記する」という決まりを厳密に守って、この本全体にわたって一貫した形式で動詞を表記する必要がある。これも、本書を使いやすい文法書にするための改良点である。

以上が、この本が『カッチャーヤナ文典』に過度に依拠していることによって生じる不便である。こういった不便が残っていると、パーリ語学習書としての本書の真価が発揮されない。もったいない話であるから、改版時には是非とも改良していただきたい。大きな問題点は以上である。残った紙数で、語彙集の問題点を指摘する。

3. この本への要望(語彙集について)

この本では、各課の末尾に練習問題が付されている。これが素晴らしい。中には「初学者にはとても無理」と思えるような難問もあって、もうすこし難易度のバランスを調整する必要があるが、ともかく、一週間かかりつきりになってなんとか解けるというくらいに丁度良い量の問題が並べてある。古代インド語を身につけるには、「苦勞して問題を解く」という経験が絶対に必要だが、この本ではそのための環境がしっかり整えられているのである。解答はついていないが、もちろんそのほうが良い。ちよつとやってみて、分からないから答を見る、ということはいくら繰り返しても力はつかず、労力の無駄だからである。解答はついていないが、出典が記されているので、頑張って訳本にあたれば、ある程度は答を見つけることができる(訳のないアッタカターからの出題もあって、それは答を自力で探すことは無理だが)。

そしてこの練習問題を解くための語彙集が巻末に付されている。したがって、この語彙集を使って単語の意味を調

べ、それを、学んだ文法規則にしたがって解釈していけば、自ずから文全体の意味が理解できる、という手順で練習問題を解いていくことが可能なはずなのだが、うまくいかない。多くの単語が語彙集で洩れているのである。You-「J」の授業を始めてみて、すぐにそれに気がついた。この本の語彙集だけでは練習問題が解けないのである。語の意味が分からなければ、初学者はその段階でうちもさっちなかなくなってお手上げとなる。仕方がないので、「私の動画で勉強したい方は、すぐに水野弘元先生の『パーリ語辞典』を買ってください。これからは『パーリ語辞典』で単語を調べるようにして下さい」と指示して、ようやく先に進むことができた。

大変な量の練習問題に現れる語をもれなく拾い上げて語彙集にするという作業は非常な労力を要する。それをショバさん一人でなさったとするなら、洩れがあるのも当然であろう。とはいえ、この本がパーリ語を学ぶ人のための本であるなら、学ぶためのツールは万全でなければならない。学びが途中でストップしてしまうような欠陥は一つも許されないのである。

応急処置としては水野先生の『パーリ語辞典』との併用でなんとかなる。しかしいずれは、この本一冊で独り立ちできるように磨き上げてほしい。改版の際には、巻末の語彙集を念入りに再構築して、完璧なものに改良していただくことを切に希望する。出版元の法蔵館の方々にも、この点くれくれもよろしく願います。

日本にもテラワータ仏教が定着しつつあり、パーリ語を学びたいと考える人の数も増えてきている。『パーリ語文法』の出版は、まさに時宜を得た快挙である。パーリ語原典を通して直接ブッダの教えを読むことのできる人が日本中に大勢いる、という凄惨な状況が、この本をきっかけに実現するかもしれない。ショバさんの学恩に深く感謝し、仏教学の栄光を祈念しつつ拙い寸評を申し述べた。志ある方々、ショバさんの『パーリ語文法』を手に、仏教学の大道をお進み下さい。

二〇二二年発行・法蔵館

xviii + 311 pp.

ISBN 978-4-8313-7735-2 C3587